

なぜロシア語の過去形は人称変化しないのか 分詞による時制表現

ロシア語を学んだときそれまでに学んだヨーロッパの諸語と異なる点がいくつも出てきて面喰いしましたが、その一つが過去形でした。人称変化しないのです。主語の性に応じて、動詞の語幹に単数の男性なら-1、女性は-la、中性は-lo、複数なら-liが付くのです（一部、男性で-1の付かない動詞があります）。その後、他のスラブ語を学んだとき、be動詞が付くことを知り、これは他の言語の完了形と同じだと思いました。この-1などで終わる形は能動完了分詞、L分詞と呼ばれ、いわば能動形の過去分詞です。なお、ロシア語など東スラブ語ではbe動詞の人称変化がなくなったため過去形で主語の人称代名詞が必須となり、その影響で他の時称でも人称代名詞を添える傾向が強まったといわれています。

Pol: ona to zrobiła Cze: udělala to Slov: urobiła to R: ona sdelala èto (She did it)
Ser: она је то урадила Slov: to je naredila

ポーランド語では分詞とbe動詞が融合して性・数と人称の両方で変化する形ができました。ただし三人称ではbe動詞は省略され、この点はチェコ語も同じです。 Pol: ja to zrobilem, cf. Cze: udělal jsem to. (I did it)

古代スラブ語では、人称変化する本来の過去形がありましたが、ブルガリア語以外では分詞を使う上記の形に取って代わられました。ブルガリア語では不完了過去とアオリストが残っていますが、上記の分詞を使う形も現在完了形など完了形として使われています。マケドニア語も同様です。スロベニア語では化石的表現が残っているようです。

Bul: тя го направи / тя направи това Mac: таа го направи тоа (She did it)

ヘブライ語はアラビア語と兄弟語です。挨拶のシャロームはサラームと似ていますよね。どちらも本来の意味は「平安」で、タンザニアの首都 Dār es-Salām は「平安の家」という意味です。有名なユダヤ民謡に “Shalom Chaverim” や “Shalom Aleichem”、“Hevenu Shalom Alechem” があります。shalom aleichem は salām 'alaykum (あなた方に平安を、こんにちは) とそっくり同じ表現です。ベン・ハーの Ben とビン・ラディンの Bin はイブン・サウドの Ibn と同じで「息子」という意味です。

ところが現代ヘブライ語の入門書を読んだとき、動詞の現在形がアラビア語の形と違うのです。こんなはずはと思いましたが、しばらくたってから気が付きました。これ、現在分詞じゃないかと。“書く kataba” の現在形の三人称単数・複数形は次の通りで、現代ヘブライ語では人称にはよらず性と数によって変化します。古典語の現在形は今も未来形として使われています。

	現代ヘブライ語現在	〃 未来形	古典ヘブライ語現在	アラビア語現在	〃 現在分詞
男	kotev kotvim	yiktov yiktevu	yiktob yiktabu	yaktubu yakutubūna	kātib kātibūna
女	kotevet kotvot	tiktov tiktoṽna	tiktob tiktoḅna	taktubu yaktubna	kātibat kātibāt

aní koré séfer be'anglít (私(男)は英語の本を読む)

aní koréṯ séfer berusít (私(女)はロシア語の～)

hu koré séfer be'ivrít (彼はヘブライ語の～)

hi koréṯ séfer be'aravít (彼女はアラビア語の～)

hem kore'ím séfer begermanít (彼等はドイツ語の～)

hen kore'ót séfer beyapanít (彼女等は日本語の～)

以上、スラブ語で過去形の代わりに完了分詞を、セム語で現在形の代わりに現在分詞を用いるようになった例を紹介しましたが、インドのヒンディー語では、現在形と過去形があるのは honā (be) だけで、他の動詞は、現在形も過去形も分詞を使います。karnā (do) を例にとると、未完了分詞 kartā と be動詞 honā の現在形で現在を、未完了分詞と honā の過去形 thā など未完了過去を、完了分詞 kiṽā/ kie/ kī/ kīm だけで単純過去を、完了分詞と be動詞の組み合わせで現在完了と過去完了を表します。否定形では現在形の be動詞は省略されます。(なお、不確定未来という形がありますが、honā の現在形の人称変化と類似していることからわかるように、かつての現在形の名残りだそうです。) パンジャーブ語も同様に分詞を使いますが、同じインド・アーリア語でもベンガル語やネパール語、マラーティー語は本来の現在形と過去形を保存しています。

vah ek patr likhtā hai (he writes a letter) likhtā は likhnā (write) の未完了分詞、hai は honā の三人称単数現在形

us ne ek patr likhā (He wrote a letter) likhā は完了分詞、us は vah (he, she, it) の斜格、完了分詞が他動詞の場合、その活用形は直接目的語の性・数に応じて変化します。そして、行為者(意味上の主語)は後置詞 ne

を従えた能格形を取ります。

直接目的語が後置詞 ko を従える場合は完了分詞は男性単数形となります。

サンスクリット語の動詞は、数が単数・双数・複数、時制が現在・未来・不完了過去・完了・アオリスト、態が能動・反射態・受動態、法が直説法・命令法・希求法/祈願法・条件法・接続法・指令法と揃っていました。ただし、受動態は動詞の語根に接辞-yāを加えて新しい語幹を作るもので、反射態と似た変化をします。準動詞も、受動過去分詞・能動過去分詞・絶対分詞・不定詞・能動名詞・動詞的形容詞と完備していました。しかし、動詞の活用は複雑なので、活用形を使わない表現方法が発達していくこととなります。たとえば仏教典の冒頭によく出てくる“によーぼーがーもん如是我聞”（斯くの如く我聞く）はサンスクリットでは evaṃ mayā śrutam（このように私によって聞かれた）であり、śrutam は過去受動分詞中性形ですが、このままbe動詞なしで過去の受身形を表します。ここではbe動詞ありませんが、幾つかの助動詞の変化だけを使い、一般動詞は分詞で表す方法は、煩雑な動詞の活用形を使わなくて済むのでサンスクリットの時代から多用され、その後インド・アリア諸語に受け継がれていきました。

ケルト諸語では、現在や過去時制にも単純形の他に複合形を使う表現が発達しており、特に口語で常用されています。フランス北西部のブルターニュ語では、ober (do)の現在形+現在分詞で現在を、kaout (have)の動名詞 endevout または bezañ (be)+過去分詞で過去を表しています。ウェールズ語でも、現在形や過去形も含めて、一般動詞の時制は bod (be)の時制変化形+時制小辞+動名詞という複合形で表されるようです。

屈折語の種々の複雑な活用形を使わずに助動詞+準動詞で表現する分析的表現は、他民族との交流が活発な場で特に発達したようです。他語話者にとって複雑な変化形をマスターするのは大変ですから。そして非母国語話者が話す崩れているが簡単な表現が徐々に広まっていったのでしょうか。英語がその代表例です。英国では、先住民のブリトン人に加えて、紀元前1世紀にローマのカエサル、5世紀中葉にアングロ・サクソン人、8世紀末から北欧のデーン人など、異民族の侵入が相次ぎました。デーン人は9世紀末にイングランド東北部のデーンローに定住し、古英語北部方言に影響を与えてその簡略化・分析語化を促していきます。11世紀中葉のノルマン・コンケスト以降は支配階級が話すノルマン語（ノルマンディー・フランス語）と、庶民の話すアングロ・サクソン語と、先住民のブリトン語が並存した状態が続きます。15世紀始めに英語が公用語となった頃には、名詞の格変化は早くにほとんど失われ、動詞の人称変化も簡略化していき、現代語にかなり近い状態になっていました。そして母音の大遷移もやがて始まります。これが異民族との関わりによることは、他民族による大規模な占領を受けずに、名詞や動詞の活用変化を保持してきたドイツ語と比べれば明らかです。

アケメネス朝時代の碑文に残る古代ペルシア語をみると、紀元前5世紀前半までの初期の碑文ではサンスクリットに似た古代語の感じがするのに、紀元前4世紀中葉の後期碑文では、格変化がほぼ失われてその代わりに前置詞が現れ、また複合時制が使われ始めるなど、中期ペルシア語に近づいているそうです。中期ペルシア語であるパフラヴィー語は紀元後3-7世紀のササン朝で使われていましたが、10世紀から始まる近代ペルシア語との違いは語彙や発音を除けば僅かです。古代ペルシアの場合は征服されたのではなく多くの異民族を服従させて多民族国家になったのですが、被征服民が公用語を覚える必要があったわけです。このペルシア語の屈折語から分析的言語への進化は、二千数百年前に始まり、千数百年前にほぼ完成しました。アラビア文字と大量のアラビア語彙を採り入れ、同系のパルチア語やソグド語を吸収して9世紀までに成立した新ペルシア語も、小アジア、中央アジア、インド大陸における公用語として広い地域で何百年も使われ、各地の言語に大きな影響を与えてきました。

助動詞と分詞を使った他の複合時制についても概要をみていきたいと思えます。

完了形

ラテン語では、能動形では現在形、未完了過去形、未来形、現在完了形、過去完了形、未来完了形がすべて、助動詞を使わず動詞一語で表す単純時制となっており、be動詞＋分詞の複合時制を使うのは受動態の三種の完了形だけです。サンスクリットもほぼすべて単純時制です。現代の印欧諸語では、完了形は大部分が複合時制になっており、未来形もロマンス諸語で不定詞＋habere から新たに形成された以外は助動詞を使っています。

ポルトガル語では過去完了(大過去)に have と過去分詞を使った複合形の他に単純形も使われているようです。ルーマニア語も同様です。なお、スペイン語ではこの単純形過去完了がその後に接続法過去(RA形)に転用されたそうです。

Mais tarde, soube que a rapariga decidira ficar no hospital. (ずっと後に、私はその娘が病院に留まることに決めたことを知った)

cf. A borboleta tinha entretanto saído pela janela fora. (その蝶はいつのまにか窓から外に出てしまっていた)

スワヒリ語には他の時制標識と並んで現在完了を示す時制標識-meがあります。ただし、これは時制を表さないので、実際には(ku)wa (be)と組み合わせた複合時制を使います。

Wewe huwa umejifunza Kiswahili asubuhi. (あなたはいつも朝にスワヒリ語を学び終える)

Watoto wamekuwa wanasoma Kiswahili darasani. (子供達はスワヒリ語を教室で学び終えた)

ドイツ語では動詞によって完了形に使う助動詞が違いましたよね。gehen (行く), kommen (来る) など移動を表す動詞; werden (なる), aufstehen (起きる) など状態変化を表す動詞; その他 sein (ある), bleiben (留まる), begegnen (出会う), gelingen (成功する), geschehen (起こる) など(変移動詞と呼ばれる)では sein を使い、他動詞などその他の動詞ではhabenを使います。なお、ドイツ口語では現在完了形を単なる過去として使うそうです。完了形が過去形の領域を侵食していくのは一般的な傾向とみなされており、特に口語において著しい現象です。

オランダ語やデンマーク語などでもほぼ同様に使い分けています。オランダ語では zijn (be) と hebben (have) を使いますが、beginnen, blijven, komen, vallen, vergeten, worden, zijnなどで zijn を取るほか、移動を表す動詞は行先や方向が明示されている場合は zijn、そうでない場合は hebben を取るそうです。betrokken, breken, doen, gaan, liggen, lopen, zitten など場合に依じてどちらも取る動詞もあるそうです。

イタリア語の近過去(現在完了)でも移動や状態変化、状態、存在などを表す自動詞や再帰動詞では essere (be) を、他動詞と lavorare (work), abitare (live), correre (run) など一部の自動詞では avere (have) を取ります。essere の場合は分詞の性・数が主語のそれと、avere の場合は直接目的語のそれと一致します。先に見たヒンディー語の過去形と同じですね。フランス語の複合過去も同様です。

ゲルマン諸語のうち英語とスウェーデン語だけは、完了形を表す助動詞として ha (have) だけを使います。ロマンス諸語のうちのスペイン語、ポルトガル語やルーマニア語も同様です。古英語では have＋名詞＋過去分詞であったのが、中英語(11～15世紀)で have＋過去分詞の形が確立し have の文法化(完了の助動詞として確立)が成立しました。ただし、かつては自動詞に対して be を使っており、have が優位に立ったのは18世紀のことで、今も時に be gone などの表現が見られます。また完了形と進行形を一緒に使えるのも英語の特徴です。ドイツ語でも中高ドイツ語で12世紀にはhabenの文法化が完成したと考えられます。

先に述べたように、ロシア語などのスラブ諸語では完了の意味ではなくなって過去形になっていますが、be動詞だけを取ります。ヒンディー語では完了分詞 kiyā/ kie/ kī/ kī と be動詞 honā の組み合わせで現在完了と過去完了を表します。どちらも分詞は性・数変化します。ペルシア語も過去分詞＋būdan (be) で完了を表しますが、こちらは分詞は変化しません。バスク語も完了分詞＋be動詞で完了を表します。

リトアニア語では, būti (be) ＋過去能動分詞で完了形を形成しますが、be動詞、特に三人称単数はしばしば省略されます。分詞の性・数は主語と一致します。

ギリシア語では, ἔχω (have) ＋不定詞で完了形を作ります。この不定詞は、アオリストの不定詞に由来するもので完了形の形成だけに使われ、完了非過去形三人称単数と同じ形を取ります。

アイルランド語やウェールズ語では、前置詞 **wedi (after)** を動名詞の前に置いて完了形を作ります。
Roeddwn i wedi rhedeg (was I after run)

なお、アラビア語やヘブライ語などセム語には、文法上は現在や過去という時制の概念はなく、未完了と完了という相の概念が表現の中心になります。したがって過去のことなのに未完了で表されているケースなども出てきます。もちろん、未完了形で現在を、完了形で過去を表すこともできます。アラビア語では、過去完了は **kāna (be)** の完了形+本動詞の完了形で表します。 **kāna kataba 'l-kitāba (he had written the book)**

韓国語では、完了形は **-a/-oe issda** で表します。モンゴル語では **-aad baina** で結果状態を表します。

中国語では、完了は“完”、経験は“過”で表します。また、日本語の「してある」に相当する“有”があるそうです。

我回家后给他写了一封信 (私は家に帰ってから彼に手紙を一通書いた) 我去過北京 (私は北京に行ったことがある)

ベトナム語では、時制詞 **đã** を動詞の前につけて完了を表します。

Tôi đã đi Nha Trang bao giờ (I have never go to Nha Trang)

その他、フィン語では動作の完結を示す場合は目的語を対格にします。対格は、単数では属格と、複数では主格と同じ形です。そうでない場合、目的語は分格を取ります。

なお、ナイジェリア北部/ニジェール南部のハウサ語では、時制や相を動詞で表さず、代名詞を変化させて表すそうです。

私はペンで書く	現 Ina rubutu da alkalami	過 Nayi rubutu da alkalami	未 Zanyi rubutu da alkalami
彼は本を読む	現 Yana karanta littafi	過 Ya karanta littafi	未 Zai karanta littafi

完了形で未来を表すことがあります。

分詞構文の話で紹介しましたが、スラブ諸語の動詞は完了体と不完了体という2つの形があり、完了体は一回の行為の完了やその結果を表しますが、その現在形は未来を表します。

中国語の完了を表す語気助詞“了”は、未来における状況の変化を表すことができます。

快要放暑假了 (もうすぐ夏休みになる)

モンゴル語の近過去 (自分で経験・見聞した過去の出来事や予期していた出来事について主観的に述べる) **-laa** も近未来を表す用法があります。 **Bi yablaa (私はもう行きます)**

トルコ語やウズベク語の過去形 **-di** も近未来を表す用法があるそうです。 **Geldim (いま行きます)**

日本語でも古典語で完了を表す「ぬ」「つ」や現代語のタにも近未来を表す用法があると云います。

“はや舟に乗れ、日も暮れぬ” (早く船に乗れ、日が暮れてしまうぞ) “ちょっと待った”

進行形

進行形は、特別の形がなく現在形で表す言語が多数派です。必要なら **now** などの副詞で明示します。また詳しく言うと進行相と継続相と反復相が区別され、それぞれ別の表現を持つ言語もあります。

英語の進行形の起源としては、ノルマン・コンクエスト後の中英語の時代に現れた**be**動詞+現在分詞**-ende** と **be+**前置詞**on**+動名詞**-unge** があり、前者はラテン語に範を取ったものと考えられ、後者はケルト諸語に類似の形がありました。前者は必ず進行形を表すとは限らず、またどちらも常用されてはいませんでした。英語の動名詞（動詞派生名詞）は、古英語の時代には**-ung**, **-ing** でその直接の子孫ですが、元来は純粋な名詞で目的語や副詞を従える動詞の機能は持たなかったそうです（当初は**-ung** 形が優勢であったが、13世紀に衰え、**-ing** 形が取って代わったようです）。現在分詞（形容詞）は古英語の時代には**-ende**, **-iende** などの形を取り、中英語ではその後継形**-ende**, **-inde**, **-and** でしたが、それに加えて、東南方言に **-inge**, **-ynge** の形が現れ、これが14世紀以降に古い形を駆逐して現在の**-ing** になったと言われています。有力な仮説として、**be+on+doing** の**on**が弱化して **be a-doing**、さらに **be doing** となったと考えられています（この **a**-の形は現在でも方言などに残っているそうです）。そして、**-inde**-と**-inge** の語末音が弱化して類似の音になったことも手伝って、現在分詞の動詞的機能が動名詞に吸収されていき、また進行形が**-ing** になるのに伴って、名詞を修飾する用法の現在分詞もこの形に統合されていったといえます。**be+ing** の形は15世紀後期に現れ、18世紀末に常用表現となり、義務的となったのは19世紀半ばということです。受身の進行形は18世紀に現れ、20世紀になって漸く容認されるようになったそうです。

þonne beo we sittende be þæm wege, swa se blinda dyde (then we should be sitting at the way-side, as the blind man did)

Ic was on huntunge (Ælfric of Eynsham 11世紀末)

I killed the slave that was a-hanging thee (Shakespear: Ling Lear)

Your mother's coming to your Chamber, make all sure. (Shakespear: Romeo&Juliet)

-ing, **-ende** は他のゲルマン諸語では、ドイツ語**-ung**, **-end**、オランダ語**-ing**, **-end**、スウェーデン語**-ning**, **-ende/-ande** など対応する形が現在もそのまま使われています。後者はロマンス語の**-ando** などとも同源とされています。

フランス語には進行形はなく、スペイン語やイタリア語には **estar (be) + 現在分詞-ando/iendo**, **stare (be) + ジェルンディオ (-andoなど)** の形がありはするものの、現在形で表すことが多いといえます。習慣などを表す場合に**be**動詞の代わりに **andare (go)** や **venire (come)** を使う形もあります。

Sp. el hombre está corriendo (the man is running)

これらの言語では過去を表す形が複数あり、過去進行形はそのうちの半過去（点過去）で表します。ラテン語の未完了過去に由来するものです（完了過去に由来するものは単純過去、遠過去）。

リトアニア語では**be**動詞+現在能動分詞**-antis/-intis** に **be-**を付けた形で進行形を表す表現があります。

アラビア語では基本的に現在形で進行も表しますが、能動分詞で進行形を表すこともできます。

ドイツ語にも進行形はありませんが、一部の方言で **sein (be) + am/im/beim + 不定詞** という形があり、広まりつつあるそうです。オランダ語にも類似の **zijn (be) + aan het (on the) + 不定詞** という形がありますが、現在形を使う方が普通だそうです。

アイスランド語には、同様の **vera (be) + að (at) + 不定詞** という形があるそうです。

hann er að lesa bók (he is reading a book)

欧州ポルトガル語では **estar (be) + a + 不定詞** の形があります。 **o homem está a correr** 一方、ブラジルポルトガル語ではスペイン語と同じ **estar (be) + 現在分詞** の形を使うそうです。

ケルト諸語のうちアイルランド語には **bheith (be) + 前置詞 ag (at) + 動名詞** を使って進行形を表す表現があります。動名詞の目的語は属格になります： **Tá sé ag léamh an leabhair.** (He is at reading a book)

ウェールズ語にも同じ **bod (be) + 前置詞 yn (in) + 動名詞** の形があります：

Dw i ddim yn gweld y ferch. (I am not in seeing the girl)

ブリトン語の後裔であるフランス北西部のブルターニュ語では、前置詞を使わず英語と同じく、**bezañ (be)** + 現在分詞で進行形を作ります。

トルコ語では不定詞の処格 **-makta** で進行形を表します。 **in/at doing** と同じ言い方です。

ヒンディー語では動詞原形 + **rahnā** (留まる、住む) で進行形を表します。
kar rahā hai (している) cf. **kartā hai** (する)

ペルシア語では現在進行形は現在形の前に **dāshtan** (have) の現在形を、過去進行形は過去形の前に **dāshtan** の過去形を置きますが、これは新しい口語用法のようで、半世紀前の教科書には出てきませんでした。

エストニア語の進行形は特殊で、目的語を分格にすることで表します。なお、現在形は目的語を主格にします。
Peeter kannab puud tuppa (ペーテルは薪を家の中へ運んでいます) **Peeter kannab puud tupp**a (～運びます)

フィン語でも同じ形を使います：**Maija odottaa bussia**. (マイヤはバスを待っています)。フィン語ではこの他に、**ma**不定詞内格を使う **olla (be)** + **-massa** という形もあります。
Minä olen ravintolassa syömässä. (私はレストランで食事しています)

スワヒリ語には進行を示す時制標識 **-ki-** があります。ただし、これは時制を表さないので、**(ku)wa (be)** と組み合わせた複合時制を使います。

niṅasoma kitabu (I read a book) **nikisoma kitabu** (I am reading a book)
nilikuwa nikisoma kitabu (I was reading a book) **na**は現在、**li**は過去を表す時制標識

アラビア語では現在形と現在進行形の区別はなくどちらも未完了形で表しますが、過去進行形は **kāna (be)** の完了形 + 本動詞の未完了形で表します。

qabla sanatāni kuntu ʔadrusu fī ʔamarika (before two years I was studying in America)

アルバニア語では現在形および未完了形の前に小詞 **po** を置いて進行形を表すそうです。

Po kërkoj një libër në shqip. (私はアルバニア語で書かれた本を探している)

be reading, running と **be stopping, arriving, dying** は違いますね。前者は動作の継続を表し、後者は完了に向かって動作が進行中であることを示しています。日本語でも「しつつある」が動詞の意味に応じて両方の意味を明確に示します。これらを区別して継続相、進行相ということがあります。両者を区別する言い方のある言語もあります。

中国語では動詞の後に進行では「正、在」、継続では「着」を付けて区別しています。
他们在开会呢 (彼らは会議中です) 他正打乒乓球呢 (彼はちょうど卓球をしているところだ)
他在沙发上坐着 (彼はソファに座っている)

また動詞の直後と文末に“了”を繰り返して継続を表すこともできます。後の“了”は状況の変化を表します。
我都等了两个小时了 (私はもう1時間も彼を待っている) cf. 吃饭了! (ご飯を食べるよ) 开会了! (会議を始めるよ)

ベトナム語では動詞の前に時制詞 **dang** (當) を付けて進行を表します。

Mẹ tôi đang nấu cơm. (母はご飯を作っています)

習慣などを表す反復相 **Habitual** をもつ言語もあります。英語の助動詞 **used to** がそうです。

ケルト諸語のうちブルターニュ語では **bezañ (be)** に反復形があり、一般動詞は **bezañ** の反復形 + 現在分詞でこれを表すそうです。アイルランド語でも **bí (be)** に独自の反復形があります。

広東語では“開”が反復相を表す助動詞として使われるそうです。 我住開香港

ハンガリー語では **szokik** (get accustomed) の過去形 + 不定詞 **-ni** で習慣を表します。
A leveleket reggel szoktam elolvasni. (I generally read the mail in the morning)

モンゴル語では動詞語幹に **-dag** を付けて習慣を表し習慣形と呼ばれています。

Bi öglöö бүр doloон cagt bosdog. (私は毎朝七時に起きる)

トルコ語の中立形-er/-ir/-rも習慣を表すことができます。Fatma sabah erken kalkar. (ファトマは朝早く起きる)

日本語の「している」は動詞の種類や態によって進行を表すことも完了を表すこともあります。進行を明示したいときは、書き言葉では「しつつある」などとします。主に西日本方言で進行を「しよるくしおる」、完了を「しとる、しちよるくしておる」と区別している所があります。このように二重の意味があるのは、完了は結果の存続と捉えることができるからだと思います。

同じ動詞でも文脈に応じて違った意味になることがあります。「彼女は服を着ている (ところだ)」は進行相に相当し、「彼女は青い服を着ている」は結果の状態を表しています。

日本語では、“読む”などは終点のない動作を示す継続動詞(活動Activity動詞)とされ、“到着する”などは一瞬のうちに動作が終わり結果が実現される瞬間動詞(到達Achievement動詞)に分類されます。「ている」は、継続動詞では継続を、結果を実現するまでに時間のかかる完成動詞(達成Accomplishment動詞、“作る”など)では進行を表し、瞬間動詞では完了の結果を表します。一回動作を表す瞬間動詞“叩く”などでは反復を表すこととなります。完成動詞も受身形になると「作られている」と完了の結果、つまり完了状態の意味となります。第四のタイプ、状態State動詞は“備える”の形で静的な状態を表しますが、“備えている”ということもできます。この四種の分類自体は他の言語にも当てはまります。

朝鮮語では進行形に日本語と同じく -go issda という形があります。完了形(結果状態、既にしている)は -a/-oe issda と言います。モンゴル語も同様に、進行形は -c/j baina、完了形は -aad baina と言い、アイヌ語もそれぞれ、kor an、wa an で表します。ただし、モンゴル語の -c/j bainaは、進行、継続の他に動詞の種類によっては結果状態も表します。

ハンガリー語には -va/ve という形の副動詞があり、副詞句を作る副動詞として“～しながら”の意味で使われます。これとbe動詞 van を組み合わせた形 a kapu csuk-va van (その門は閉まっている)は単に現在の状態を表します。これに接動詞 be を付けた形 a kapu be van csuk-va (その門は今閉まっている)は、以前は開いていたことを知っている場合に使い、動作が行われた結果今の状態があることを示すそうです。接動詞はドイツ語の分離動詞の前綴りのようなもので、条件によって動詞の直前に来ることも動詞と離れて文末に置かれることもあり、基本動詞の意味を変化させます。be の本来の意味はintoです。intoの意味の格語尾 -ba/-be と関係があるかもしれません。

進行形のある言語でもない言語でも、「～中である」に相当する迂言表現、例えば英語の be in the process of -ing、フランス語で être en train de ... などがしばしば使われます。前述の欧州諸語などのbe動詞+不定詞/動名詞の形も言語学的には迂言表現とされています。

その他の相、起動相Inceptive (“し出す”など)や終結相Cessative (“してしまう”など)などは主に補助動詞で表されるようです。ラテン語では、amo (to love) > amasco など動詞語幹に -sc- を挿入して、起動相を語彙的に表しています。

スラブ諸語、例えばロシア語では、一定の方向に向かって移動する意味の定動詞の不完了体動詞に接頭辞 po- や za- を付けて、やはり開始の意味の動詞を語彙的に作ります。 bežat' (走る) > pobežat' (走り出す)

リトアニア語には、būti (be) + be- 現在能動分詞で起動相を構成的に表す表現があります。be- は継続を表す接頭辞です。 Aš buvau beeinantis iš namų, kai pradėjo lyti. (雨が降り始めたとき私は家を出るところだった)

動詞語幹に挿入して終結相の意味をもつ動詞を作る接辞をもつ言葉が北米にあるそうです。